

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目
氏 名学業場面における課題価値の機能と規定因の検討
—課題価値の多面性に着目して—

解良 優基

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、わが国の児童・生徒のもつ学習動機づけ上の悩みとして学びの意義や価値に対する認識の低さという問題に焦点を当て、親や教師による働きかけがどのように子どもたちの学習への価値の認知を媒介し、学習行動へと影響するのかについて実証的な検討を行った。本論文は、動機づけ概念の中でも特に個人が認知する学習課題への価値づけを指す概念である課題価値 (task value) という概念的枠組みに着目した。その大きな特徴は2点であり、①個人を学習課題へと接近させる複数のポジティブな価値づけ (興味や有用性など) に加え、個人を学習課題から回避させるネガティブな価値づけ (コスト) も含んだ価値のタイプに対する精緻な視点と、②社会・文化的な変数から個人の動機づけ変数への影響を仮定した媒介モデルという2点である。

第1章では、課題価値に関連する先行研究を概観し、問題の所在を指摘したうえで本論文の目的を示した。第1節では、課題価値という概念の理論的背景について概観した。アトキンソンの古典的な期待—価値理論からエックレスらの現代的な期待—価値モデルへの変遷を示し、動機づけ研究における課題価値の理論的な位置づけについてみた。さらに、課題価値と他の動機づけ理論やモデル (自己決定理論・達成目標理論・学習動機の2要因モデル) との対比を通して、課題価値という概念のもつ独自性について検討を行った。第2節では、課題価値研究について学習行動との関連と課題価値の社会化という2つのトピックに焦点を当て、先行研究で得られた知見を概観した。第3節では、課題価値の先行研究の問題点として、以下の2点を指摘した。1点目は、ポジティブな価値の多面性を十分に扱えていない点である。エックレスは、課題価値のポジティブな側面として興味価値、獲得価値、利用

価値と複数の側面を概念化している。しかし、理論的にはこのような概念化が論じられている一方で、実証的には各価値の機能が十分に検討されてきたとは言いがたい。また、2点目は、ネガティブな価値的側面であるコストについて、ポジティブな価値との統合的な検討がなされていない点である。コストは近年海外において注目されつつあるものの、多くの先行研究ではポジティブな価値とコストの独立の効果をみるにとどまり、これら2つの併存した状態が個人の学習行動に及ぼす影響について検討されていない点を指摘した。第4節では、これらの問題点を踏まえて本論文の目的について提示した。

第2章では、わが国の生徒を対象に教科として理科を取りあげ、ポジティブな課題価値の質的な違いが、児童・生徒の学習行動にどのように異なる影響を及ぼすのかについて検討を行った。まず、わが国の中学生を対象にポジティブな課題価値の認知を測定する尺度作成を行った。因子分析の結果、興味価値、獲得価値、制度的利用価値、実用的利用価値の4因子が示された。また、個人のもつ達成目標志向性との関連から、作成した尺度における一定の信頼性と妥当性が示された。次に、研究1では、作成した尺度を用いてポジティブな課題価値の各側面と学習行動（学習の持続性・興味の追求・学習方略の使用）との関連について2つの調査を通して検討した。その結果、興味価値は測定した学習行動の諸側面と関連を示しており、生徒の学業達成において重要な機能をもつ側面であることが示された。制度的利用価値は、特に学習方略の使用との関連が強くみられた。獲得価値と実用的利用価値は、それぞれ授業外の学習行動である興味の追求に影響することが示された。以上より、ポジティブな課題価値の各側面はそれぞれ異なる形で生徒の学習行動に影響を及ぼしていることが示唆された。研究2では、ポジティブな課題価値の各側面が理科学習へのエンゲージメントに及ぼす影響について、年齢との交互作用効果がみられるかという点について検討を行った。小学生・中学生・高校生を対象に、それぞれ理科学習に対するポジティブな課題価値認知と行動的エンゲージメントについて尋ねた。重回帰分析の結果、興味価値と制度的利用価値において学年との交互作用効果がみられ、年少者よりも年長者において興味価値と制度的利用価値の行動的エンゲージメントへの効果は強いことが示唆された。以上の研究より、課題価値の各下位尺度はそれぞれ異なる特徴をもつことが示された。

第3章では、ポジティブな課題価値の各側面の規定因として、教師や親など子どもにとっての身近な大人（社会化エージェント）の意識や行動に着目して検討を行った。研究3では、社会化エージェントとして教師を取りあげた。中学生と高校生を対象に、認知された課題価値の教授と生徒のポジティブな課題価値評定との関連について検討を行った。重回帰分析の結果、中高生ともに学習内容を生徒の日常生活と結びつけるような実用的利用価値の教授を行うことが、生徒にとって複数の課題価値の認知を促進することが示唆された。研究4では、中学生とその母親を対象

に調査を実施し、親子間における課題価値の伝達プロセスについて検討を行った。具体的には、母親の認知する学習への価値づけが母親の関与行動を媒介し、子どもの課題価値の認知に影響するという一連のプロセスについて、母親の認知する子どもの学業達成に対する期待の高低がこれらの効果を調整するという仮説を検証した。その結果、母親の期待が高い場合に、母親が理科に対して認知する課題価値は、関与行動を媒介して子どものポジティブな課題価値の認知に影響することが明らかになった。親子のみでなく、教師による課題価値の伝達についても今後同様の枠組みによって検討する必要があるものの、子どもの課題価値認知への働きかけを考える際に、社会化エージェントが子どもの学業における成功を高く期待していることの重要性が示唆された。

第4章では、ポジティブな課題価値のみでなく、ネガティブな価値的側面であるコストも含めて課題価値概念を統合的に扱い、学習行動への影響について検討した。ポジティブな価値を高く認知していたとしても、学習者は同時に課題に対してコストをも高く認知している場合があるだろう。しかし、これら2つが併存しうることによって生じる学習者への影響についてはこれまで検討されていない。このような点について検討するために、研究5ではわが国の中学生を対象に行われた社会調査で得られたデータをもとにし、コストと同様に学習回避動機と考えられる学習上の悩みと、利用価値の認知の2変数を用いてクラスター分析を行った。その結果、利用価値を高く認知すると同時に学習上の悩みも高く感じている葛藤認知群の存在が示された。また、各クラスターと学業達成や精神的健康との関連をみると、葛藤認知群は利用価値を高く認知しているにもかかわらず、学業達成や精神的健康の得点において、利用価値を低く、学習上の悩みを高く認知する低動機づけ群のクラスターとの間に差がみられないという結果が得られた。また、研究6では大学生を対象に、3種類のコストと興味価値についてそれぞれ学習の持続性に対する交互作用効果がみられるかを検討した。その結果、必要な努力量の認知を指す努力コストについては交互作用効果がみられ、努力コストの高さはポジティブな価値と結びつくことによって学習の持続性に促進的な影響を示した。その他の価値ある活動の機会喪失を指す機会コスト、および活動に伴うネガティブな心理的経験を指す心理コストの2つについては興味価値との交互作用効果はみられず、両者は加算的な関係性にあることが示唆された。これらの結果より、第3章までで示されたようなポジティブな価値への介入のみでなく、学習者のコスト認知にも考慮した介入の必要性が示された。

第5章では、これまでの研究によって得られた知見を整理し、本論文の意義と今後の課題・展望が議論された。本論文は、ポジティブな課題価値の多面性について実証的に明らかにしたほか、それぞれの価値の規定因とその調整変数について検討した点でエックレスらの課題価値モデルを精緻化したと考えられる。また、本論文

ではポジティブな価値のみでなく、コスト概念にも着目してこれら 2 つの統合的な検討を行った。課題接近的な動機を扱う動機づけ理論が多い中、課題回避的な動機であるコストをモデルの中に組み込んでいる点は、アトキンソンのモデルの流れを汲む課題価値概念の大きな特徴といえる。したがって、本論文でみたようにポジティブな価値とコストの併存状態に注目して検討を行ったことは、学習動機づけに対する課題価値概念独自のアプローチを提案した点で理論的な意義があると考えられる。また、本研究で得られた知見をもとに効果的な課題価値介入への示唆として、学習内容と子どもの実生活との結びつきを示すこと、社会化エージェントの認知する子どもの学業達成への期待を高めること、学習者のコスト認知をも踏まえた介入をデザインすることといった 3 点に焦点を当てて具体的な支援について議論した。最後に、本研究の多くは理科学習を対象に検討を行ったため、他の課題や教科への知見の一般化という点は今後の課題である。また、本論文で検討された課題価値の伝達プロセスについては文化差がみられる可能性が考えられるため、この点についても今後さらに詳細な検討を行っていく必要がある。